

# 学生参加型授業を企画して



鎌田 康裕

金沢大学総合科目企画学生委員会

はじまり 二〇〇二年四月十五日曜日、「生と死を見

つめて」と題された金沢大学の教養・総合科目は、三百人を収容する講義室に学生が座りきれないという大盛況のなか始まった。学生が企画した授業に対して、あきらかな反応を受け取った瞬間であった。「学生参加型授業」という言葉すら知らず、ただ面白いことをやってみたい、大学で確かに自分がかを行つたという証を得たい、そう思っていた数人の学生の活動は、この時確かな足跡を残し始めたのだった。

金沢大学総合科目

企画学生委員会

金沢大学でやっている「学生参加型授業」は、全国でも珍しい試みであるそうだ。私たちは自分たちの活動を他大学の学生や教員に宣伝をしているのだが、殆ど初めて聞いたという反応ばかりなのだ。興味を持つていただいた方々からも、あるいはインターネットからも、特定の教員の授業の企画を学生が手伝うという形式しかないのである。学生参加型授業が流行ろうとしているという噂は入ってくる。しかし具体的な前例が無く、むしろ私たちが情報の発信者になろうとしている。

私たちのやっていることがどれだけ前例の無いことであ

るかも、情報がないため何とも言えない。ただ珍しい取り組みであるらしいことだけは感じられた。

そんななか、手本とすべき事例もなく手探り状態で進んでいったが、とりあえず二〇〇二年度の授業の中に「学生参加型授業」が加えられることになった。

本稿では学生参加型授業の企画を通して得られた、学生主導による企画活動の難しさや、授業開始後に生まれた「企画側の学生」と「受講する学生」との意識のギャップといったものを紹介し、考察を行いたいと思う。それぞれの過程で予想しえない問題点も発生した。単に学生が授業を企画するという目的だけでなく、その他の目的も付加された。



かまだ・やすひろ●一九七九年、福井県生まれ●金沢大学大学院教育学研究科社会科教育（社会学）専攻、修士課程一年●金沢大学で行われている総合科目企画学生委員会について委員会を

代表して書かせて頂きました。皆さんに現状を伝えられるかが今回の原稿の苦勞したところです。企画した講義の具体的な内容をお知りになりたい方は、金沢大学総合科目企画学生委員会のホームページをご覧下さい。ご意見ご質問もいただけると、今後の活動のヒントになりますので併せてよろしく願います。

私たちの活動理念（大袈裟だが）も少しずつ大きくなっていった。そういったことにも触れていきたいと思う。

まずは「総合科目企画学生委員会」という私たちのグループ、およびその対象とする総合科目についての説明をしたい。

金沢大学に授業を企画する集まりが誕生したのは二〇〇一年の六月のことだ。学生参加型授業の一環として法学部の青野教授によって提案されたのがきっかけだった。青野教授が学生を募るために貼った、「学生で授業を企画してみませんか」という内容の張り紙が発端となって集まりが開かれた。後にこの中で参加の意思（実際の行動を伴った）を示した十名余によって、授業の企画は進められることになる。名称が「総合科目企画学生委員会」となるのは、本格的に活動し始めた十月に入ってからだった。

さてこの委員会の企画だが、企画しやすいだろうということと総合科目を中心に行うことになっている。この総合科目は、金沢大学における教養的科目の中に含まれている一分野で、言語、テーマ別一般、基礎、ゼミの各科目と共に設定されている。総合科目は他の科目と違い、複数の教員によって授業がなされる点に特徴がある。設定されたテーマに従い、各教員がそれぞれの専門分野の視点で授業し

ていく形式で、様々な視点を組み込むことができる。授業を企画する学生にとって一人の教員の授業を設計するより取り組みやすいだろうということで、委員会では総合科目を中心に企画した。

### 企画段階

総合科目を企画するには、単位を出す授業を設計する者として必ずぶつかる難関がある。

教員が単位を出すための評価基準を、明確に設けられる内容にしなければならぬことである。面白い内容、学生の要求に近い内容を提供することには問題はない。ただそれが「授業」ではなく「講演会」になってしまっただけではない。内容の密度を保ったまま、学問としての重要なポイントを含めなければならないのだ。これは新しい企画を立てるたびに悩まされる課題である。

この委員会は手探り状態で進んでいったと書いたが、その理由は情報不足だけではない。企画を行うのが学生だけであることもその理由の一つに挙げられる。実際に授業を企画するといっても、今まで自分で授業をしたことのないメンバーが殆どであるため、授業構成の具体的なイメージが浮かびにくいのである。当時のメンバーは四年生が二人、二年生が一人、残り五人が一年生という状況であった。四年生は教育実習や卒論などの経験があるため、簡単な構成

ならできそうだったが、残りのメンバーはまず企画全体を組み立てることに慣れることから始めなければならなかった。

企画の課題の一つが「講演会」になってしまわないようにということだった。しかし、今度はここに二つ目の課題が立ちあらわれた。それは学生の望む内容を含めることができるかということである。学問として構成しなければいけないが、学生に興味を抱かせる内容も共に含まれていなければならないのだ。自分の目的に必要な「専門科目」とは違い、「教養科目」である以上、幅広い学生に受け入れられなければならない。しかも受講者は、まだ大学受験を終えたばかりで、受け身の学習から抜けきれていない新生が中心になるのである。積極的に関心のある分野を学ぶ姿勢を促すようなものも考えなければならなかった。

### 学生主導

私たちの委員会は、学生主導によって行われている。詳しくいうと、この会は「委員会」という名称を使っているが、大学の中の公式団体ではない。企画内容を教員に相談することはあっても、基本的に作業は学生が進めていく。公式団体ではないため、大学の援助はいっさい得られない。青野教授の発案であるということ、教室を貸していただいているが、常に使用でき

るわけでもない。

公式団体ではないため、本当に自主的に活動したい学生だけで運営されている。後でも委員会のこれからの課題として触れようと思うが、新しいメンバーも完全に自分たちで探さなくてはいけない。企画を発案するだけでなく、将来の運営や、学内・学外への宣伝等も自分たちで行わなくてははいけないのである。いかなれば無数にある非公認のサークルとなら変わりのない立場にある委員会なのだ。

学生主導という言葉によって、自分たちがやらなければならぬという気持ちが生まれてくる。こうした使命感は私たちのメンバーの意欲の支えになっている。しかしそれがまた過剰になってしまうこともある。過剰な使命感は一般の学生との意識の格差をうみ、私たちの学生による学生のための企画をするという目的を阻害してしまう可能性もある。自分たちが非公式の立場にあることによって、自分たちは自分たちだ、失敗してもともと、やれるだけやってみようという気楽な気持ちが使命感との均衡を保ち、一般の学生から離れることを防いでくれるだろうと感じている。そういった点では非公式なことも一つの利点といえるだろう。

## 企画から授業へ

授業の企画と言っても、全員で一つのテーマを話し合いながら決めるのではない。いくつか、アンケートによってテーマの候補が挙げられる。そしてメンバーの興味のより高いテーマを選び、担当者を決め、それぞれがそのテーマの授業計画草案を作る。その草案を全員で煮詰めていくのだ。ここから先は流れを追って、シラバス（授業計画）に載るまでの作業を説明したいと思う。

### (1) テーマ設定

先程も述べたが、企画のテーマは授業内容の主要軸となるもので、科目名やキーワードとしてシラバスに載せられる。まず一般学生からアンケートで、また委員会のメンバーからも幾つかのテーマを集める。その中から実現可能性の高いテーマをさらに選択していく。ここで考慮されるべきことは、まず総合科目として開講するに相応しいかどうかである。一人の教員のみでできるテーマであれば取り上げることを避ける。また講師がそろうかどうかも考慮されなくてははいけない。外部から講師を迎えるには謝金が必要のため、大学側の予算の関係上外部講師には限りがあるからである。できるだけ大学内の教員で講師をまかなわなくてははいけないのだ。

こうして始めに私たちが設定したテーマの一つが「NP O」もう一つが「生と死」であった。この二つはそのまま私たち学生による初の企画授業として今年度の教養的科目の一つとして開講されている。

## (2) 草案作り

テーマが決まると次に各回の授業計画を含めた内容を決めなくてはならない。話し合いも、よけいな時間を消費しないために草案を作りそれを全員で討論することになる。当時四年生が（私を含めて）二人いたため、実際NP Oに参加している私が「NP O」を、もう一人が「生と死」を担当した。全十五回といっても、ガイダンスやテストもその中に含まれるため、授業回数は実質十三回程度となる。この十三回の中で、設定されたテーマを学ぶうえで必要な概説を学ぶ回、実践や現場の方の話を聞ける回、さらに法律などの観点から学ぶ回を崩さぬように組んでいく。

この草案作りのなかで必要になってくるのは、自分なりの問題意識を持って、実際に問題となっていることを見ていくことであった。「私が問題だと思います」と感じていても、すでに議論し尽くされていることがある。そういう時に「では実際にはどうか」ということで、現場の方に

来ていただいた方が面白いという結論に達することになる。授業の企画をするために、その何倍もの資料と時間が必要だということがわかる。と同時に、大学の教員が授業を行うために、たとえそれが長年研究してきたことによる知識の蓄積があつても、授業を組み立てるのはそれなりの労力がかかるのだということもわかる。

簡単なレポートを書くつもりで草案作りを行う。それが一つの資料となるため、委員会の他の学生が話し合うテーマについて知識を深めることにもつながることになる。一つの自主ゼミのような形が生まれるわけである。またいくらかの知識を得ること、実際に講師をお願いする際に、話して欲しい内容を伝えやすくなるということにもつながる。

## (3) 話し合いとコーディネーター依頼

草案を委員会に出すと、ここから二つの作業が同時に行われる。授業内容の検討と、授業の責任者になっていただくコーディネーターを探すことである。検討は、どの授業内容に重点を置くか、さらにどんな内容を盛り込みたいか、または必要ないか、どの教員にどの内容の授業をやっていただくかという点について行われる。より学生に親しみやすく、かつ学問的にも考えられる時間があるように話し合

いをするようになる。

企画内容の検討と共に進められるコーディネーターの依頼は、総合科目企画学生委員会が企画した授業を実現するために不可欠である。私たち学生には責任者として授業を開講する権限はない。学生の成績を付けることもできない。そこで授業の責任者として、また成績を付ける責任者としてコーディネーターが必要なのだ。また専門的知識を活かして私たちの作った企画内容にメスを入れていただくことにもなる。素人である学生がいくら話し合っても限界がある。うまく構成できない部分を持ち込んで、コーディネーターと共に最終的な授業計画に仕上げていく。実際に授業をするのは講師であるので、講師陣がやりやすいように内容を変えていく必要もあるからだ。ようやく教員やテーマに関係ある方といった学生以外の作業に進むわけである。

コーディネーターにはまた、学生だけでは埋められなかった授業担当者紹介の役目も負っていたりすることになる。だいたい各学部から学生が集まっているとはいえず、全ての教員の、しかもその研究内容までは把握できない。外部の方の方が適任となるときさらに探るのが難しくなる。より授業を充実したものとするための相談役になっていただくこと

言ってもいいかもしれない。コーディネーターさえ決定し、授業立案の申請をしていただければ、あとは授業開始まで細かい内容を検討することになる。

#### (4) 授業担当講師を決める

授業を担当していただく講師は、まず委員会側で見当をつけておく。この授業内容だったらこの教員がやっている、といった学生の情報をできるだけ集め、それぞれの候補を選んでおく。コーディネーターに授業内容を持っていく際には、基本的には講師を紹介していただくが、コーディネーターが紹介できない回についてはこちらから提案することになる。また、どうしてもこの講師に担当して欲しいという場合は、コーディネーターと相談という形になる。

金沢大学には七百名近い教員が在籍している。これだけあれば講師を担当していただくのもさほど難しいことではない。しかし、誰がどの研究をやっているかを全て把握することは不可能に近い。そこで委員会のメンバーがそれぞれの友人や、指導教員から、どのような研究が金沢大学で行われているのかの情報を集めていった。この情報は講師探しの資料となるばかりでなく、金沢大学にはどのような教員がいて、どのような研究がされているかを把握させてくれた。自分の周りだけしか知らない状態から、少しずつ

大学全体を見られる状態にさせてくれたのである。

#### (5) 講師担当依頼

それぞれの授業を担当していただく場合、コーディネーターから依頼していただく場合と学生が直接交渉に行く場合がある。コーディネーターを依頼する際にお願いしている手前、委員会側としてできることは協力することを伝えるている。一部の講師の方に学生がお願いにあがるのも委員会の作業の一つである。

自分たちで講師の方に依頼するという仕事は、総合科目企画学生委員会の中で重要なものとなっている。なぜなら、アポイントメントを取り、会う日時を交渉し、依頼を引き受けていただくというのは、電話やメールでの交渉のしかた、実際に会ってからの言葉づかいや作法を学ぶ場になるからである。授業の企画を通して、そういった技術の伝達も行われるため、自分の大学の教員といえども、依頼の際の行動のしかたは重要なのである。

#### (6) 事前打ち合わせ

講師が決まると、委員会が提案したテーマについて、講師の方なりに各内容の授業をやっていたことになる。そうすると、残っているのは成績評価と授業の受講定員だけになる。授業の開講時間に関してはコーディネーターに

一任することになるので、委員会としてあまりタッチすることはできない。受講定員は、委員会企画の授業が開講される時間に開講される他の授業の受講定員、開講数、人気があるか否か等を考慮する。さらに講師の方の出席確認や成績処理の間も含めながら考えて決める。この際には受講動向もある程度把握しなければいけない。これに関しては二〇〇二年度前期の学生企画授業「生と死を見つめて」において、大きく予想が外れた。当初受講人数は百人弱であるだろうと考えていたのだが、三百人を超える受講希望者が集まってしまった。最も広い講義室が空いていたおかげで受講を断念してもらおう人数は少なかったが、こういったことがないように、ある程度予想する必要があるのである。

さて最後に残った成績評価についてだが、普段は教員が決める成績評価の基準を、学生も共に決めるという話し合いである。成績評価という今まで殆ど学生が関われなかった部分にまで委員会では踏み込んでいった。これは初めから青野教授から出されていた課題であったのだが、授業によって成績評価方法（レポート・テスト他）だけである場合もあれば、評価基準にまで学生の意見をくみ入れる授業もあった。

成績評価の基準を学生が決めると、評価を甘くして単位の取りやすい授業にしてしまうこともありうる。委員会のもつとも注意した点は評価基準を厳しくしすぎたり、甘くしすぎたりしないようにすることだった。成績評価を甘くしすぎると学生の人気は出るだろうとは思う。しかし授業を通して一つでもいい、何か達成するということが無くなってしまうおそれがある。また厳しすぎれば、受講者が減るばかりか、学生の反感を買ってしまう。委員会のメンバーは必ず一人は授業内容を見届けるため受講することになっているが、単位を取ろうとすると授業の把握ができなくなってしまう。そのため登録せずに授業に出ることにしているために単位とは関係なくなる。一般の受講者は単位がかかってないから厳しい基準にできるのだと反感を持つだろう。これでは学生のための学生参加型授業への理解が得られなくなってしまう。

事前打ち合わせは、こうした事務的な話と、授業の最も重要な構成要素の一つを決める場になる。しかしここでもっとも問われるのは、総合科目企画学生委員会が発想だけでなく、その他の部分においてもしっかりと構成ができるかどうかである。学生は興味のあることに対して自己学習ができるか、授業設計が自己学習に基づいて構成できる

かを試される場であるとも言えるだろう。

総合科目企画学生委員会の活動の流れを、課題となった点や我々が考えたことを踏まえて追ってみた。委員会の集まりは週に一度二時間程集まる程度である。仕事はそれぞれが分担されたことを次回の集まりまでに行い、全員では検討するだけである。分担と言うより分業と言った方が近いかもしれない。実際に企画した授業が始まるまでは、それほど苦労したという感覚はない。全てが初めてのことで、手探り状態のために戸惑うということはあったと思う。しかし実際の苦労は企画が実際の授業としてスタートしてから感じるようになった。以下では企画した授業が進む中で現れた問題や不安、またこれからの課題について考察したいと思う。

### 授業が始まって

ここまでで紹介した委員会の仕事は二〇〇二年度においても行われている。

昨年度の企画はすでに授業としてスタートしているが、来年度に向けてさらに新しい授業を提供するためである。つまり現在、総合科目企画学生委員会では、学生企画の授業における問題点の修正と共に、新企画の立案・実現化を行っているわけである。



ここでは問題点の紹介を行い、また、委員会の抱える課題、委員会の方針、学生・教員に対する委員会のスタンスを提示し、考察してみたいと思う。

私たち金沢大学総合科目企画学生委員会では、発足当初次のように対象を明確化した。対象を明確化することは、さらにそれぞれの対象に対してどのような接し方をしているかを委員会のメンバーが把握しやすくすることに繋がるだろうと考えてである。

対象 ①教員

②学生

③大学

④地域

まず①教員であるが、初めから授業を企画するということには、教員に対して学生の意見をぶつけるという意味が含まれている。しかし私たちは、教員に対して授業をしてもらうだけでは、学生の意見を自分の授業に反映させている他の活動との違いがわからなくなると考えた。そこで明確な目的を持って、学生が主体的に働きかけていくことを示すことにした。まだきちんと明文化してはいないが、共通意識として委員会のメンバーは多かれ少なかれ持っている考えである。上記のように対象を分けることも、この考え

から生まれたことである。教員という対象に私たちが働きかけることの第一は、私たち学生が聞きたいと考えている授業を開講していただくことである。委員会からお願する授業内容は、それぞれの教員が研究していた、または研究していることである。興味のある研究があれば聞きたいと思うのは当然である。人数が多くなれば直接訪ねて話をするのが不可能になってくる。委員会が働きかけ授業を担当していただくことで、より多くの学生が興味を持っている研究の成果を聴く機会が生まれることになる。教員の研究に触れる機会を作ることが働きかけの一つの目的である。また七百名近い教員がいると、自分の学部以外の授業や研究は全く知らないまま卒業していくことになる。全学部の教員が担当する教養科目を履修していても、知っているのはごく一部だけなのである。それぞれの学部でしか知られていない名物授業・名物教授を他学部の学生に知ってもらえるように科目を設計するのも、また委員会の働きかけの一つである。

委員会の発足当時は、教員への働きかけは授業内容に関することだけであった。しかし、次第に教養で授業を行う教員に対し、事務的な部分の要請を行うようになってきている。例えば金沢大学の教養科目履修の手続きでは、受講

票を学期第一回目の授業で受け付ける。受講票が授業の適正人数を超えていれば抽選となる。この点については三年程前から新しい履修システムが加わった。一人三枚まで持っている優先受講票を使えば、受講希望者数が適正人数を超えていても、優先的に受講できるようになったのだ。ここで問題になるのは、学生の適応は早かったのだが、教員の中に新方式に対応しきれず、優先受講票も普通の受講票と同じように扱ってしまうということが起こったことだ。

第一回目の授業終了後のことだったため、委員会の対処によってなんとか解決された。優先受講票を提出した学生は履修を許可し、その他の学生をレポートによって適正人数まで絞り込むことにしたのだ。しかしこの際にとった一度受講票を受け取った後に受講を取り消すという方法は、学生が同じ時間の他の授業に移ることを妨げるため行つてはならない。それよりも問題なのは、学生側から見ても毎年教員に配られるマニュアルが活かされているとは思えないことだ。

そのマニュアルは前年度からの変更点もしっかりと明記されている物であるそうだが、システムが変更し最も問題となるであろう部分について、教員が把握できていないのだ。教員が把握していないために学生に影響がでることに

ついて、しっかり把握していただくように働きかけることも委員会の仕事の一つとなったのである。

### 大学に対して

授業の企画を通して学生の意見を訴えかけることは教員に対してだけではない。

先に挙げた③大学も当初からの対象であった。というよりも委員会自体が大学に働きかけるために招集されたといつてもいい部分もある。大学改革・独立行政法人化など、近いうちに大学を取り巻く環境が大きく変化することはわかつていた。将来を見越し、個性的な大学改革の一端としてこの学生による授業の企画も考えられたと思われる。そのため委員会は大学に対しても少なからず働きかけていかなければならないと考えたわけである。

初めの方でも述べたが、総合科目企画学生委員会は大学に公式の団体として認定はされていない。あくまでもある教授の試みでしかない。そこで私たちはその立場を利用するため、ある共通意識を考え出した。それは、「学生が自主的に行っている活動であっても、大学の事務手続きを逸脱しないこと。それが大学にとって良い方向に働くことであれば受け入れてくれるだろう。その程度の度量がなければこの大学は学生にとってただのお飾りではない。私たちがやらねばという使命感も必要だけど、それよりも大

学の力量を測る気持ちも持とう」というものである。後付で考えた共通意識であっても、自分たちの意志である。教授から示された他律的な意志ではない。この大学を選んで本当に良かったかを問う重要性も持っていると思う。

勿論大学改革の一端を学生も担うという意志もある。しかし、現在学生は大学機構を構成する一員として考えられていない。少なくとも学生としてはそのようにしか感じられない。その理由として自治会などの活動が低迷し、学生側から大学自体の運営について要求が突きつけられることもなくなったこともあるかもしれない。それにしても大学は学生を意識しなすぎず。こういった現状では学生が大学そのものに信頼を寄せることが難しい。大学が学生が大学の一員として運営の一端を担える力があると考えるようになって欲しい。委員会の活動が、学生を見直すきっかけになつてもらえればよいと考えているのだ。もし大学が学生の存在を全く視野に入れない場所として進んでいくのなら、総合科目企画学生委員会のみならず、その他の自主的な活動も消滅するであろう。学生も馬鹿ではない。余計な労力は使わずに単位だけ取って通過していくだろう。大学が活性化を望むのなら、自分の大学に在籍する学生を積極的に構成員の一部として取り込む姿勢が必要である。

### 一般学生に対して

これまで教員と大学についての委員会内では学生が意見を主張するだけでいいのかという意見も出てきた。企画した授業を受ける学生を見てのことである。授業が始まってもいっこうに私語をやめない学生がいたからであった。講師が話し始めてもうるさいままで、授業内容が聞き取れないのである。委員会のメンバーは自主的にこういった活動に参加するだけあり、基本的に人の邪魔はしない学生達である。そんな彼らにとつて、迷惑な学生のおしゃべりは、学生の意見をできるだけ汲み取って企画に反映しようという意志を阻害するものであったのだ。そこで三つ目の対象が生まれた。それが委員会に属さない一般の学生である。

どれだけ学生が考えを教員に訴えかけても、学生が一定のマナーを守っていなければ、それはただのわがままになる。委員会は担当の講師に、授業の邪魔になる学生がいる場合の対処を厳しくして頂くことをお願いした。二度ほど授業の場で注意されると他の学生の邪魔になるようなおしゃべりはなくなつた。こうしたこともあり、学生に対する委員会の働きかけも必要だと実感したのである。授業中の態度はそれぞれの講師に対応して頂くほかない。しかしレ

ポートの形式やレジюме・プリントの決まり事ならでき  
る。形式を予め指導することで、レポートの質の低下を防  
ごうと考えたのだ。形式が指導されれば内容に集中する割  
合が増えるからである。入学したばかりの学生が戸惑うと  
ころを、さりげなくフォローすることにしたのだ。大学で  
当たり前とされることを伝えることで、レポートのマナー  
の維持をねらった考えである。

学生自身には大学を構成する一員という意識など微塵も  
ない。寧ろ学生というよりは「生徒」と言っても違和感が  
ない。それほどまでに全てに受け身で、何かしてくれなけ  
ればわからないという学生が増えた。これは私自身が毎年  
新入生からの質問を受けていて感じたことである。高校ま  
では全ての情報が先生から毎日伝えられた。しかし大学で  
は自分で掲示板を見なくてはいけない。二つも三つもであ  
る。何かをしたい、何かに参加したいと思ったら自分でそ  
こに問い合わせたり、訪れたりしなければいけない。誰も  
替わりはしてくれない。ここに学生と教員・大学とのギャ  
ップが生まれる。サークル参加者も減り、上級生とのつき  
あいがないためノウハウが伝わらない。教員は当然と思っ  
ているため軋轢が生じる。そこで教員には「学生」ではな  
く育ててやる「生徒」だという意識を幾ばくか持っていた

だくのだ。学生には入学したての時に、自分でやらなくて  
はならないことをうるさく伝える。こうすれば互いの距離  
も縮まり、とまどいと「知らない」が減ることだろう。委  
員会ではそのより具体的な方法も考える。直接は関係ない  
ことだが、学問をする上での先行投資にきつとなると考え  
ているからである。

#### 地域へ

私たちは地域も対象に挙げている。外部講師と  
して来て頂いた方の団体と、授業以外でも関わ  
っていかうと考えている。来て頂いた方がボランティア団  
体ならば、授業終了後もその団体の活動を宣伝する機会を  
作るといった方法が取れるだろう。また最近金沢大学内に  
誕生したNPOの研究会などの団体と協力できればと考え  
ている。

委員会はまだ発足して一年しか経っておらず改善点も多  
い。しかしこれから先、それぞれの対象に働きかけていく  
ことが、上記の問題点を改善していくきっかけになればい  
いと考えている。

#### 総合科目企画学生委員会の

#### 抱える課題

委員会が抱える最大の課題  
は新メンバーをいかに増や  
すかである。少しずつ増え  
てはいるものの、公式団体としての宣伝が行えないことと、

信用度がまだまだであるため宣伝効果も薄いのである。現在の学生は特定の傾向を持つ団体に対して大きな不安を抱いている。知名度が薄いと間違われかねない。知名度・認識度をいかに上げるかもこれからの課題である。

企画に関する課題は、自分たちが感じたこと、興味を持ったことを如何に展開させるかである。これからさき自己満足に陥らず、広く興味を惹く授業を企画するためには、斬新な発想と構成力が必要になる。今まで深く学んだことのないテーマについて授業を構成することは難しい。構成に手を抜かず、興味深いテーマをただの講演会にならないようにしなければならない。また少しでも学生の望む内容が含まれるように、コーディネーターや担当講師との話し合いにも手を抜いてはいけないだろう。

注意を払い続けなくてはいけないのは、自分たちと同じ学生との距離をどう保つかである。あまりに高い理想は一般の学生から敬遠される。学生のためのもと言っても、結局自己満足以上にはなりえないからだ。アンケートなどの結果を考慮に入れ、一般の学生の意識から外れないように注意していく。それとともに学生の勝手な意見の統合にならないようにも注意しなくてはならないだろう。

## 最後に

金沢大学で行っている学生参加型授業についてはこれまで述べてきた。学生が授業の一部を担うことは難しいと感じてしまうかもしれない。しかし金沢大学では、総合科目企画学生委員会が企画した授業の他に学生参加型と言える授業がある。教育学部生の殆どが受講する専門の授業である。その授業の日程の後半は、学生による教育実践記録のプレゼンテーションと、その記録についてのディスカッションになる。二百人前後の学生が幾つかのグループに分かれて、発表とディスカッションの為にグループ討論が行われる。担当教員は後半は実践記録を幾つか提示し、後はディスカッションのコーディネーター役のみをおこなう。学生は実践記録を討論の話題として紹介しなければならないため、実践背景や関連研究などを調べることになる。発表のための打合せも入れると、たった数十分のために、何時間もの準備が行われるのだ。これは学生が授業を行っていると言ってもかまわないだろう。テーマは予め提示された中から選ぶわけだが、逆に教員の側で簡単な枠組を作ってやることで部分的に学生が授業を行うことを可能にしている。この例は一定のルールがあれば学生にも授業ができる、授業の一部を担うことができるということを示していると言える。

近年では、斬新な発想のできる学生は多いのではないだろうか。大学に入って間もない一年生と話していても、集団に囚われない個人の自由な発想が出来るように思える。しかしそれが展開していかない点が現在の学生の問題点ではないだろうか。興味を持った事柄について自分なりに深めていく姿勢が薄いのである。授業で興味を持ってもらえれば、斬新な発想が大きい成長していくだろう。総合科目が学習へと繋がっていかない。そのため解りやすい、見たいの派手なプレゼンテーションが多い授業を評価するのだ。そうなることと現在導入されようとしている学生による授業評価も、内容のおもしろさよりも見た目の派手さが重視される危険がある。その危険を回避するためにも、教員には学生が自分たちの発想を学習などの次の行動につなげ

る手助けを行う必要があるのではないだろうか。発想力はあるが、運営する力、構成する力、発想を受ける側にたつた思考力が欠けているのである。学生の気持ちがよくわからないとか、昔は当たり前だったことが出来ないといったことを言っているのかもしれない。逆に方法を手ほどきすれば、斬新な発想が大きく成長していくだろう。総合科目企画学生委員会は授業の企画を通して、学生が数年先にも思い出せるほどの、満足感の大きい授業を作ることが委員会の願いである。